

5 県オリジナル品種「さぬき姫」の栽培支援

■ J A 三木町地域イチゴ部会 ■

(東讃農業改良普及センター 佐野 有季子)

●対象の概要

J A 三木町地域イチゴ部会は、部会員40名、栽培面積が673 a で、「女峰」、「さぬき姫」を栽培しており、地場の市場、京阪神、関東方面と、幅広い販売先に出荷している。

J A 三木町地域イチゴ部会は「女峰」の産地であったが、品質の低下や市場要望の高まりなどをきっかけに、徐々に「さぬき姫」への品種転換が進んでいる。平成26年度産では、作付面積の約60%が「さぬき姫」となった。

表 1. 「さぬき姫」栽培面積の推移

	H23	H24	H25	H26
いちご面積(a)	620	576	660	673
さぬき姫面積(a)	125	212	301	396
さぬき姫割合(%)	20.1	36.8	45.6	58.8

●課題を取り上げた理由

三木町地域は「女峰」の産地として市場の高い評価を得てきたが、いちご単価の低迷や、気候変動による厳寒期の低温による正形果率の低下、燃油代の高騰などから、農家所得の低下が問題となっていた。「さぬき姫」は正形果率が高く、また低温管理が可能で燃油代の削減に繋がる品種であることから、品種転換は農家の所得向上を図る上で重要である。

「さぬき姫」は「女峰」と異なる品種特性を有しており、特に「さぬき姫」は「女峰」に比べ高温に弱いため、育苗期のランナー発生速度の低下が問題となった。

また、「さぬき姫」は受け育苗を基本としているが、三木町地域は「女峰」の産地であったため、受け育苗の経験や設備を持たない生産者もいた。設備的に受け育苗ができない生産者が、品種転換に際して「女峰」と同じ方法で挿し育苗を行い、想定していた活着率が得られなかった事例が見られた。

本ぼ定植後の管理においても、なり疲れ、ガク枯れ、春先の果実硬度低下などの問題が発生する事例も見られた。

●普及活動の経過

「女峰」からの品種転換で「さぬき姫」の栽培を開始する生産者に対し、育苗方法や本ぼ管理における違いについて、重点指導を行った。栽培指導についてはJ A 担当者と連携し、作業時期前の講習会開催や、定期的な巡回指導を行い、農家の不安や疑問点の解消に努めた。

1 育苗期の高温対策

従来の「梅雨明け以降に遮光する」という意識を変えるため、4月中に講習会を行い、遮光の必要性を強調した。また、5月に全いちご農家を巡回し、遮光資材の設置状況の確認と、設置の指導を行った。

2 挿し苗育苗農家への支援

「さぬき姫」で挿し苗育苗に取り組む生産者に対し、「女峰」より早い時期に挿す、遮光率を上げる、活着を目視で確認し、活着度合いによっては葉水を打つ期間を長くするなど、品種特性に応じた管理をするよう指導した。

また、挿し苗の早期活着技術の確立のため、ランナーの切り口を挿す挿し方と強遮光を組み合わせた挿し苗方法の調査ほ場を設置して、活着率を調査した。



図 1. 調査ほ場における挿し苗育苗の様子

3 本ぼ管理の改善

養液管理・環境制御のマニュアルを改訂し、講習会や巡回指導を通じて、ガク枯れ対策の低EC管理や、春先の果実硬度維持のための葉面散布剤の活用等、品種に応じた栽培管理の普及に努めた。

4 現地検討会の支援

部会長を中心に開催された現地検討会に同行し、情報提供を行うとともに、生産者同士の交流を深め、技術向上に繋がるよう支援した。検討会は「さぬき姫」の生産者だけではなく、「女峰」の生産者も参加できるような体制で行い、「さぬき姫」に関心のある生産者が理解を深められるようにした。

●普及活動の成果

1 育苗期の遮光資材の活用推進

4月の講習会で遮光資材の早期設置を呼びかけたところ、5月中旬の巡回指導で既に遮光資材を設置している農家が多く見られた。また、早期設置した農家から近隣農家への波及効果も見られ、遅れることなく遮光資材の設置が完了した結果、必要なランナーの長さを確保できた。

2 挿し苗育苗における早期活着技術の開発

調査ほ場を2ヶ所設置し、前述の方法による活着率の調査を行ったところ、「さぬき姫」でも「女峰」並みの活着率を得られることがわかった。

表2. 活着率の調査結果

調査株数	1週間後		2週間後	
	活着数	活着率	活着数	活着率
1680	1086	64.6	1624	96.7
651	555	85.3	631	96.9

3 「さぬき姫」への品種転換の誘導

「女峰」の生産者に対し、現地検討会や巡回指導を通じて「女峰」との相違点や品種転換のメリットについて情報提供を行った結果、「さぬき姫」への関心が高まり、更に品種転換の要望が増加している。平成27年度産では、新たに4名が「さぬき姫」の栽培に取り組む予定となっている。

4 「さぬき姫」の新規栽培者の健全苗確保

初めて「さぬき姫」の育苗をする生産者に対して、育苗期の温度管理や肥培管理における「女峰」との違いについて強調しながら、講習会や定期巡回を通じて指導した。結果、平成26年度産における新規栽培者2名とも、予定の定植苗を確保することができた。

●今後の普及活動の課題

1 挿し苗育苗における栽培管理の検討

「さぬき姫」の挿し苗育苗において、活着を確保する方法については検討できたが、活着後に苗の充実を図る方法については十分な検討ができていない。「さぬき姫」は連続した出蕾があり着果負担がかかりやすい品種であるため、出蕾までにいかに株の充実を図るかを検討する必要がある。

また、三木町地域は栽培形態が統一されておらず、挿し苗育苗やピートバッグ栽培を行う生産者については、受け育苗を行い、ハンモック式ベッドで栽培する生産者とは違った、栽培形態に応じた栽培管理を検討する必要がある。

2 品質向上に向けた摘果・摘葉管理の検討

「さぬき姫」では「女峰」並みの摘葉をせずとも連続出蕾する傾向があるため、葉を残しすぎて過繁茂になり、果実の品質低下に繋がる生産者が見られた。また、摘果が十分でなく、小玉傾向になったほ場も見られた。

品質向上に向け、優良ほ場の分析を行い、作業体系を検討すると共に、現地検討会を通じて生産者の意識改善を図る必要がある。



図2. 「さぬき姫」のピートバッグ栽培の様子